

## 日本語

基盤教育院 池田 智子

本学の教育目標の一つに「国際的人材の育成」がある。「国際人」の定義がどのようなものであれ、その育成に言語・文化背景を異にする人々との交流が、大学の「国際化」には留学生の存在が欠かせないということに異議を唱える者はいないだろう。本稿では、外国語としての日本語教育を行う日本語プログラムの実践を紹介し、課題についても述べる。<sup>1</sup>

### 1. 対象

日本語プログラムが対象とするのは、留学生その他、日本語を母語としない学生である。留学生には(1)本学の入学試験を受けて入学した者(以下、「学群留学生」)と(2)海外の提携校に在籍し、半年または1年の予定で本学の短期交換留学プログラム(Reconnaissance Japan プログラム、以下「RJ プログラム」)に参加する者がいる。<sup>2</sup> 2011年度の留学生数は全学で513名だが(10月1日現在)<sup>3</sup>、日本語プログラムの科目を履修しているのは、日本語が必修の学群留学生1年生、学年に関係なく選択科目を履修する学群留学生、ごく一部の例外を除いたRJ学生全員である。最近は、日本国籍だが日本語を母語としない学生、外国籍で母語は日本語ではないが留学生選抜試験以外の入試で入学した学生の履修も増えている。

2011年度に必修の日本語を履修している学群留学生(1年生)の人数は以下の表1の通りである。春入学生と秋入学生がいるため、時期によって人数が異なっている。

表1 2011年度学群留学生(必修日本語履修者)<sup>4</sup>

学期	人数	入学時期(人数)	出身国内訳	入学時期(人数)	出身国内訳
春	70	2010秋(12)	中国10、モンゴル2	2011春(58)	中国42、韓国16
秋	68	2011春(58)	中国42、韓国16	2011秋(10)	中国10、モンゴル2

RJ(短期交換留学)の各学期の留学生数は表2の通りである。2011年度は全体で117名が在籍しているが、学期単位でみると、春・秋共に例年の110名程度を大幅に下回っている。今年度の留学生の減少は本学に限らないことで、言うまでもなく東日本大震災の影響であると考えられる。

表 2 2011 年度 RJ 学生

学期	人数	出身国別の内訳 ※ 中国は香港、マカオを含む。
春	70	中国 (31 名)、米国 (22)、韓国 (8)、アイスランド・英国・モンゴル (各 2)、タイ・ドイツ・ブラジル (各 1)
秋	68	中国・米国 (各 22)、韓国 (13)、アイスランド・英国・モンゴル (各 2)、エジプト・カナダ・台湾・チェコ・ベトナム (各 1)

## 2. 二つのプログラム

以下に、学群留学生と短期交換留学の RJ 学生を対象としたプログラムについて述べる。

### 2-1 学群「日本語専門基礎」<sup>5</sup>

学群留学生は 1 年次に英語に代わり、外国語としての日本語科目群である「日本語専門基礎」が年間 10 コマ、必修となっている。目標は (1) 大学での勉学および生活のために必要な日本語を理解し、表現することができるようになる、(2) その目標を達成するためのスキルやストラテジーを身につける、(3) 自分に合った学習方法や自分に必要な学習内容を自分で見出し、それを習得することの三点である。科目の構成と具体的な目標を以下に示す。

表 3 「日本語専門基礎」1 学期目の構成と目標 ※ 「コマ」は週当たりの数

科目名	コマ	目標
日本語専門基礎 AI	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 書き言葉を使って正確に文章が書けるようになる。</li> <li>• パラグラフを使って論理的な構成の文章が書けるようになる。</li> <li>• 自分でレポートを書くための基礎的な力を身につける。</li> </ul>
日本語専門基礎 AII	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 読解のストラテジーを身につけ、論説文が読めるようになる。</li> <li>• ニュースや新聞記事を理解し、意見の交換ができるようになる。</li> <li>• 聴解のストラテジーを身につけ、ニュースが聞けるようになる。</li> <li>• 講義を聞く技術を知り、使えるようになる。</li> <li>• 講義を理解し、ノートにまとめ、リアクションペーパーが書けるようになる。</li> <li>• 大学での勉学において必要な文法項目についての知識を整理し、適切に運用できるようになる。</li> <li>• 専門的な文章や新聞記事の中の漢字語彙や連語を理解できるようになる。</li> </ul>
日本語専門基礎 B	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 自分の状況と問題点を知り、どのような日本語が必要かを考え、学習目標を立てる。</li> <li>• どのような学習方法が自分に適しているか考え、自分の学習スタイルを知る。</li> <li>• 自分で学習を管理する能力を身につける。</li> <li>• 弱点やさらに伸ばしたい点を集中的に学習して、日本語力の向上を図る。</li> </ul>

表4 「日本語専門基礎」2学期目の構成と目標

科目名	コマ／週	目標
日本語専門基礎 AI	2	レポートが書けるようになること
日本語専門基礎 AII	2	1学期目と同様
日本語専門基礎 B	1	1学期目と同様

各学期開始前にテストを行い、高度の日本語力を有すると認められた場合には、履修を免除することもあるが、その数は概ね2～3名以下である。また、アカデミックライティングである「AI」が免除されることはほとんどない。

## 2-2 短期交換留学生 (RJ) を対象としたプログラム：「日本語」および「日本語演習」<sup>6</sup>

大学での勉学に必要なとされる日本語力を養成することを目指す学群留学生向けプログラムとは異なり、RJ プログラムの日本語科目は、様々な背景、目的、ニーズを持つ学習者を対象としている。<sup>7</sup> 受け入れの条件として一定の日本語力を求めているため、レベルもゼロ初級から上級、超級まで様々である。本国での専攻は、初級レベルでは多岐にわたっているが、中・上級では副専攻も入れると、ほぼ全員が日本語または日本語・日本文化を専攻している。毎学期、実施しているニーズ調査によると、全ての日本語レベルにおいて、留学の目的は日本語学習、日本各地・色々なところの訪問、日本人との交流が上位三位を占めている。

プログラムは、(1)多様な背景とニーズに応えるカリキュラム、(2)「日本で日本語を学ぶ」第二言語環境であることを意識・活用、(3)学生の自律的学習を重視<sup>8</sup>、(4)人と人の交流を重視した環境作りの4点を基本方針として掲げている。

クラス分けは、学期開始時のプレースメントテスト（筆記および面接）によりレベルを判定し、総合日本語であるコアクラスを決定する。「日本語演習」という名称の下に様々な選択科目を開講しているが、そのレベルもコアのレベルによって決まる。レベル1～2がいわゆる初級、3～4が中級、5～6が上級である。選択科目のうちスキル科目（口頭表現、文章表現、読解）はコアクラスとは別に独自のテストでレベル判定を行い、クラスを指定している。

2011年度の開講科目を、以下の表5～7に記す。

表5 コア科目

科目名	レベル	クラス数	コマ／週	単位
日本語 I	1 (導入・初級)	1	6	6
日本語 II	2 (初級前半)	2 (a, b)	6	6
日本語 III	3 (初中級・中級前半)	2 (a, b)	4	4
日本語 IV	4 (中級後半)	2 (a, b)	4	4
日本語 V	5 (上級前半)	2 (a, b)	2	2
日本語 VI	6 (上級)	2 (a, b)	2	2

上記の「コア」は全て、毎学期開講されている。選択科目の名称は全て「日本語演習」で始まるが、以下の表6～7では省略する。コアと異なり、週1コマ、1単位である。表6中の(\*)は、春または秋学期のみの開講であることを表す。

表6 選択科目 (コアのレベルによって指定されるもの) ※「L」は「レベル」を表す。

科目名	L	科目名	L	科目名	L
チュートリアル	1-2	体験活動	1-2	漢字 I	1-2
発音トレーニング (*)	2-3	チュートリアル	3-4	体験活動	3-4
現代大衆文化	3-4	中級文法	3-4	漢字 II	3-4
チュートリアル	5-6	体験活動	5-6	現代大衆文化	5-6
上級文法	5-6	職業コミュニケーション	5-6	地理と歴史の用語	5-6
聴解とノートのととり方	5-6	ニュースと新聞 (*)	5-6	文芸と表現 (*)	5-6
対照表現演習・日中 (*)	5-6	対照表現演習・日朝／日韓(*)	5-6	「天声人語」で学ぶ	6
読書会で学ぶ	6	報道番組で学ぶ現代日本の諸相			6

表7 選択科目 (コアとは別のレベル判定テストによりクラスが指定されるもの) ※「L」は目安となるコアのレベル

科目名	L	科目名	L	科目名	L
口頭表現 I	3-4	口頭表現 II	4-5	口頭表現 III	5-6
読解 I	3-4	読解 II	4-5	読解 III	5-6
文章表現 I	3-4	文章表現 II	4-5	文章表現 III	5-6

### 3. プログラム運営・学習支援体制

日本語プログラムの授業を担当しているのは専任教員3名、学内他学群などに所属する兼任教員4名、兼任講師18名である。また、学生の受け入れ時から様々な面で国際学生支援課、学生相談室などと連携している。

学習支援の一つとしては、「日本語学習リソースセンター (CJL)」の設置・運営が挙げ

られる。これは日本語学習のための各種リソース、辞書、雑誌、小説、DVD や PC を備えた部屋で、毎日の開室時間中、常時、受付にいる学生スタッフの他に日本語教員のいる時間帯もあり、学習相談ができる体制を取っている。また、日本語プログラムの特色ある科目、「チュートリアル」(Ikeda, Saito and Ieda, 2012)でも活用されている。従来、この部屋の利用は日本語を母語としない学生に限っていたが、今年度から試験的に、留学生との交流を希望する日本人学生も登録制で利用できるようにした。また、「クラスゲスト制度」も日本語プログラムのユニークな実践である。学生が日本語科目にボランティアとして参加するというものだが、この数年、応募者は毎学期 100 名以上にのぼっている(詳しくは本号の杉原由美氏の報告・論考を参照のこと)。

これらの実践のためには教員間の十分な連絡が欠かせないが、講師室での日々のコミュニケーションに加え、メーリングリストや e ラーニング・システムの Moodle も活用している。また、年に 2～3 回 FD を実施しており、これまでに自律学習の理論と実践、Moodle、初級の教え方などのテーマで行っている。

#### 4. 今後の課題

日本政府は 2008 年に「留学生 30 万人計画」を打ち出し、本学も学園長期ビジョンの一つとして留学生の受け入れ増加を掲げている。量の増大とともに質の問題が発生することは当然予想されるが、既にこの数年、従来の「日本語専門基礎」の枠組みでは十分な成果が見込めないレベルの日本語力の学群留学生が出てきている。また、留学生として入学したわけではないが、第二言語としての日本語学習が必要なケースも増えており、レベル、日本語力の特徴の面で幅広い対応が必要となる。短期留学生に関しては、日本語母語の学生と共に授業を受ける力のある上級学習者のニーズに応える科目の提供で、試行錯誤を重ねている。一方、この 2～3 年、初級前半の学習者の減少が目立ち、学習効果の面からも望ましくないとと言える。日本語プログラム以外の関係者とも協議の上、対応を考えることが必要だと思われる。

#### 注

- 1 本学の日本語プログラムは、齋藤伸子氏と筆者がコーディネーターをつとめている。
- 2 特定の提携校を対象としたサマープログラムも実施しているが、紙幅の都合により省略する。
- 3 日本言語文化学院(留学生別科)、大学院も含む。
- 4 学群留学生 1 年生は「日本語専門基礎」が必修だが、ここに人数が記されている学生以外に、2 年次以降で日本語の選択科目を履修する学生も多い。
- 5 さらに詳しい実践報告は齋藤(2008)を参照のこと。

- 6 選択の「日本語演習」は、上級レベルのものを中心に学群留学生在が履修することもある。
- 7 本学で初めて大学生活を経験する者がほとんどである学群留学生と異なり、RJ 学生の多くは本国の大学の3年生であるという点も違っている。
- 8 本プログラムにおける、学習者の自律を目指した実践は桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」(2007) に詳しい。

## 参考文献

- Ikeda, T., Saito, N., & Ieda, S. (2012). Learner autonomy for international students: Evolution of a university JSL program. In K. Irie & A. Stewart (Eds.), *Realizing autonomy: Practice and reflection in language education contexts*. Hampshire: Palgrave Macmillan.
- 桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」(2007)『自律を目指すことばの学習―さくら先生のチュートリアル―』 凡人社
- 桜美林大学日本語学習プログラム <<http://www7.obirin.ac.jp/nihongo/index.html>>
- 齋藤伸子 (2008)「大学生の日本語力を上げるには―日本語プログラムの実践―」『Obirin Today―教育の現場から』 pp. 43-57